

---

# 最後の夏休み

御坂 望

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最後の夏休み

### 【Nコード】

N6956H

### 【作者名】

御坂 望

### 【あらすじ】

ノツポ、変態。そして僕は無作為に高校最後の夏休みを過ごしていた。そんなある日、ノツポが放った一言から、僕達は自転車で東京都秋葉原を目指すことになる。馬鹿馬鹿しくて幼くて、でも、何処か輝いていたあの頃の僕達。時は現代。場所は日本。僕、ノツポ、変態の一生でたった一度きりの三人自転車の旅が始まった。

## プロローグ「アキバへ行こう！」

世間では日本で開催されている世界陸上や有名人の失言問題などで盛り上がっているご時世に僕達はだらけていた。

時は七月の下旬。まだまだ夏休み真盛りであり、高校生活最後の夏休みでもあった。だけど、別段特別なことも全くなく、宿題もやらずにだらだらと毎日を無意味に過ごしているだけである。

別に進路の事なんて何も考えていないし、進学するかも就職するかも決めていない。将来の夢なんてものはありもしない。

高校生活最後の青春を彼女と海で過ごす。なんて考えなかった訳でもないんだけど、僕には彼女はいないんだこれが。

太陽の熱光線ビームを浴びながら、駄菓子屋の前に置いてある椅子に座り、アイスを頬張る。両隣には小学校からの腐れ縁である二人が同じようにだらけた様子で座り、同じようにアイスを食べていた。

右隣に座っている背が高いのが通称、ノッポ。昔から背が高く、背が低い僕をチビ呼ばわりして来たから、僕が復讐の意を込めてその仇名をつけたところ、定着した。ちなみに僕、同様に高校三年間で彼女は出来ていない。

左隣に座っているのがノッポよりは背が低くて、僕よりは高い筋肉質な男が所謂、変態。小学校低学年の頃からエロに目覚め、今日に到るまでにエロ道を極め続けて来た為に僕が変態という仇名を付けた。すると、これまた定着してしまったのだ。

この変態だが、実は僕達三人の間では唯一、彼女が出来た男でもある。しかし、二週間足らずで別れてしまい、理由を聞いたところ、したり顔でこう答えた。

だって、中々やらせてくれないからさ。

その言葉を聞いた瞬間、僕は思ったね。

バカなの？ どれだけエロいの？ 死ぬの？ と。

まあ、そんな小一時間ばかり説教したくなる理由で彼女と別れた変態と部活動から引退してしまったノツポと、毎日暇を持て余している僕の三人は何をするでもなく無作為に夏休みを過ごしていた。アイスを食べ終わった僕は特にすることもなく、空を見上げる。

「あちくなく」

と僕が感想を漏らすと左隣の変態が、

「そりゃ、夏だからな」

そんなありきたりのツツコミを入れる。そんなことは百も分かっている。今は夏だから暑いのは当然か。

遠くでは蝉が鳴き続け、目の前に道路があるのだが、さつきから車一台通りやしない。

ああ、言うのが遅くなったけど、ここは東北地方のとある県の片隅にある小さな田舎町。あまりにも小さすぎて町というよりは村じやないのかとツツコミを入れなくなるけど、町なのだ。

「なあ」

これからも意味のない夏休みを過ごすんだろうなあ。そう僕が思っていた時にノツポが声を上げた。

「ん？」

僕と変態が同時に答え、ノツポもまた答えた。

「アキバにいかねえ？」

言い忘れていたけど、僕達三人は学校の成績はバラバラ。得意な球技もバラバラ。だけど、三人共通の趣味はある。それはアニメとかゲームだ。世間一般的から見れば僕達はオタクと呼ばれる部類に入るのだろうけどね。

「いやさあ。真のオタクならアキバに行かないといけないじゃん？」

太陽の熱ビームにやられてしまったのかノツポは重要なことを忘れていた。僕達は高校生だ。バイトもしていない。つまり、

「そんな金どこにあんだよ？」

そう、お金がない。僕の手持ちは二千百十二円。はっきり言って電車で往復も不可能だ。

にやりとノツポは笑みを浮かべ、駄菓子屋の横に停まっている三台の自転車を指指した。

「自転車があるじゃねえか」

アホかお前は。それが僕の感想。

「そうだなあ……毎日、こうしているのももつたいねえしな」

それが変態の感想。

折角の夏休み、何か変わったことがしたいのは僕も変態も同じ気持ちだった。結局、その日は親に聞いてからにするかということでも丸く収まり、日が落ちてくると別れた。

「で、ノツポがそんなアホなこと言い出したんだよ」

時と所変わって、夕食の一家団欒時。僕は父さんと母さんにノツポの計画を話した。当然、母さんは、そんな危ないこと止めなさいとかいつてくれると思っていたし、父さんも心よく思わないだろう。そう思っていたけど、

「行って来れば、良いじゃねえかそして旅を通じて少しは大人になつて進路のことでも考えて来い」

「ええええええ！？ 東京だよ？ 自転車だよ？ そんな危ない旅を可愛い一人息子にさせるのか〜い！」

「何を言う、可愛い子には旅をさせるつて言うだろうが。なあに自転車なら心配すんな。ロードレーサーでもマウンテンバイクでもママチャリでも好きなの使わせてやるからよ。ほら、これは軍資金だ旅の都銀にでも使いな」

そう言つて、諭吉を三枚渡された。これで旅の途中の食料を買いということだろうか。

ピンポンとお決まりの音が鳴り響き、来客があつたことを告げる。母さんが対応に向かい、少しすると、ノツポの親父と変態の親父が母さんと一緒に入って来た。

「よう、チャリ屋。ウチのバカ息子から話はきいたぞ」

「おおう、電気屋、料理屋。自転車でよけりゃ、好きなだけウチのを使え。わはははは」

僕の家は昔からこの町で自転車屋を営んでいる。父さんはじいちゃんの後を継いで自転車屋を切り盛りしているのだ。

ノッポの家は電気屋。変態の家は料理屋で、僕とノッポと変態の父さんは昔からの親友だったらしい。ちょうど僕達と同じように。

そんなこんなで親父三人衆は盛り上がり、僕達の自転車アキバツアーは決定した。つたく、少しは反対しろっての。深夜徘徊で捕まったらどうしてくれる気だ。

そんなことを思っていた僕だけど、少しだけワクワクしていたのは内緒だ。

大人の許可を得た事で次の日から僕達、三人は計画を立てた。無闇に実行に移しても遭難は必須なので、まず地図の購入。ルートの設定、食料と飲料の確保が焦点になった。もつとも、これは全て僕が言い出したことで他の二人と言ったら、

「行き当たりばったりでも大丈夫だろ？」

マジでアホか。大丈夫な訳ないだろうに、遭難して死にたいのかと言いたいよ、まったく。

持っていくものの分担はそれぞれの家を考えれば自ずと分かるものだ。

まず、自転車屋の僕はタイヤがパンクした時の修理用キットに地図など。料理屋の変態は飲み水や食料全般。電気屋のノッポはキャンプに使うアウトドア用品。

ここで補足しておくとして電気屋のノッポの家にそんな物があるかと言うと、何故かは知らないが取り揃えていたから。と言う他ない。

七月下旬に提案され、計画して来た自転車ツアーの出発日は八月一日に決まった。

その日の早朝六時。僕達三人は真新しくイカしたマウンテンバイクに跨り、駅前から伸びる町を出る為の一本道の前で並んでいた。後ろを振り返ると、そこには見送る町の人々。なんているはずもなく、ただただ道路が伸びていただけだった。

「よし……行くか」

「ああ」

「アキバを目指してなあ！」

変態、僕、ノツポの順で口を開き、大きな荷物を背負いながら自転車のペダルを大きく踏み込む。

ノツポの提案から始まった高校生活大一番の計画は今、実行に移されようとしていた。

## プロローグ「アキバへ行こう！」（後書き）

この作品を呼んで頂きましてありがとうございます。いつかは書きたい書きたいと思っていた作品ですのでこうして書くことが出来て、かつこのような場で発表することが出来て嬉しいです。

この物語は実話を基に再構成したフィクションであり、今からもう数年も前のお話ではありますが、思い出とは美しいもので、今でも鮮明に思い出す事が出来ます。少しの間、この物語が完結するまでの間、お付き合い頂ければ幸いです。



## 第1話「分別を持とう！」

出発したのが六時で今が九時を少し回った時間だから、約三時間を費やして僕達は三十キロ離れた白岩市に到着した。

白岩市は僕の住んでいる町よりはずっと大きくて、この辺では都会と呼ばれている。勿論、東京とは比べるべくもなく、田舎なんだけどね。

大きなショッピングモールの横を通り過ぎる時にノツポと変態が、「うっわ、超都会じゃねえ！？マジやべえよ〜！」

などと騒いで少し恥ずかしかった。そりゃ、僕達の町よりかは都会だけどさ。騒ぐほどのことでもないでしょうが。

先はまだまだ長いので、僕は遅い朝飯を食べることを提案して、それに二人も賛成した。適当に食べる場所を探していると、東湖公園という場所にたどり着いた。

なんでも、日本一古い公園らしく伝統も由緒も溢れる場所らしい。そんな公園の芝生の上で僕達三人は大きな背負い鞆からおにぎりを取り出す。

僕の鞆には自転車修理用のキットや医療品に水筒。それに少しばかりのインスタント食料入っている。後は着替えと下着だ。軍資金は三万円。他の二人の分も足せば十万を超えるので金に困ることはないだろう。

おにぎりを食べながら辺りを見回す。

桜並木の道は春になると言葉に出来ない程、綺麗に彩られるらしいが、残念な事に今は夏だ。しかし、太陽の光を反射して銀色に光る湖や、手入れの行き届いた綺麗な噴水。それを見ているだけでも心が洗われる気がする。こういうのを風流というのだろうか。

「すげえな」

隣で変態が感嘆の声を上げた。芸術などに全く興味がない変態でも何かを感じ取れたのか、僕は少しだけ嬉しくなった。

「おつ、お前もそう思う?」

「だけど、変態に少しでも期待した僕がバカだったのかもしれない。

「ああ、すげえよな。あの女子高生のスカートの丈の短さ! ほら

! あれなんかもう見えそうじゃねえか。くうたまんねえ!!」

「……あつ?」

変態の視線の先には地元的女子高生の集団がいた。確かに僕達の学校の女子より遙かにミニスカートだ。生足だ。いや、その魅力は確かに否定できないけどさ。

「やっべやっべ、オレ、ナンパしてきちゃってもいい?」

「勝手に行ってろ」

冗談のつもりでノツポは言ったのだろうけど、変態にその手の冗談は通じない。本当に変態は女子高生をナンパしに走って行ってしまったのだ。残された僕達二人は遠巻きに変態の背中を見ながら呟きあつ。

「あいつ、置いてくか?」

「いや、まあ。そうしたいけどね……」

正直、飲料と食料担当のあいつが居なくなるとこの旅自体、続行が厳しくなってしまう。だからこそ、少しは大目に見てやらないといけないのだ。

自転車でしかも子供達だけで旅行と言う普段の生活とは違うので、気分が高揚してハイになってしまふ気持ちも分からなくもないのだが、もう少し高校生として分別を持って……ああ、今時の高校生に分別を持っている人が居るほうが稀か。

スキップらんらんで走って行った変態は遠めでも分かるくらいに戸惑いもなく歩いていた女子高生に話し掛けていた。

数十秒後、女子高生が走って逃げ出して行った。きっと真面目な子だったのだろう。今日の経験がトラウマにならないことを切に願う。合掌。

おにぎりを食べ終わり、お茶を飲み一息つく。まだまだ変態は元気で今度は三人組の女子高生と何やら話し込んでいた。

「あつ、あれ、さつき逃げてつた奴じゃね？」

ノツポが指差した先を僕も見ると。確かにさつき逃げ出して行った真面目な子だった。隣に誰か一緒に居る。青い服を着ただれか：

…、

「つて警察じゃねえか!？」

道のはるか向こうからやって来ている独特の青い服を身に纏った大人は間違いようもなく警察官だった。

きつと変態に声を掛けられた真面目な子が交番にでも駆け込み、変質者が居ると言つて連れて来たのだらう、はつきり言つてやばい状況だ。

僕とノツポはさつさとずらかりたかつたので、大急ぎで荷物をまとめて変態に早く戻つて来いと声で伝えるが、何を思ったのか変態のバカはこつちを振り向いたのだが、笑顔で手を振るだけだった。

「あのボケつ死なす！」

至極正論だった。そして僕は悟つた。今から走つて行つて変態を無理矢理に連れて来るよりも、絶対に警察官が変態に声を掛ける方が早いと言つ現実を。

僕は駆け出そうともせずに、諦めの境地で警察官が変態の肩を叩く瞬間をただ見ているだけだった。

ああ、もう。いっそのことそいつを留置所にぶち込んで欲しいくらいだ！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6956h/>

---

最後の夏休み

2010年11月5日14時07分発行